

イザヤ書 6 章 1-13 節 「わたしを遣わしてください」

イザヤ書1―5章で偶像礼拝、姦淫がはびこり、宗教的頹廃が国中に起こり、6 章でウジヤ王が死に、国が混乱しているときに、イザヤは召命を受けたのです。この時すでに預言者として活躍していたイザヤに、神はあえて現れたのです。それは、イザヤに自分の罪の自覚、罪人の一人だと言う自覚が欠けていたからでした。それを自覚したイザヤは、5節「災いだ。わたしは滅ぼされる」と口にします。神はイザヤをこの告白に導かれるために、6 章で現れたのです。そして6節、イザヤに起きた裁きと同時に、神の側の一方的な救いの業が、7 節で赦しの宣告がなされます。自分の存在が罪である事実。ここで「もう死ぬ」と言ったイザヤが、生き返るのです。そしてさらにイザヤは、驚くべき神ご自身の声を聞きました。聞こえてきたのは、神ご自身が愛しておられるイスラエルの民に今、遣わしたいと願っておられる声でした。神はもう一度信頼して下さる。しかも神様の最も大切な、神の民を任せたいとされるのです。

イザヤは赦しと同時に、神の召しを受けました。「ここに私がおります。私を遣わしてください」という8節の言葉です。イザヤは、決して自分に自信があるから言ったのではないのです。「こんな罪人を救って下さった。この神がこんな者をも用いて下さるなら、どうぞ使ってください」と。神の愛に対して立ち上がってくる、その信仰の応答で答えたのです。これは私たちにも言えるでしょう。礼拝に招かれ、神さまの御言葉を聴き、応答し、そして自分の日々遣わされる。その中にあって、あなたをその場に遣わすのだ、と神が私たちを招かれているのです。ここにいて一人一人、全ての方が神さまに招かれ、召命を与えられている、そのことを今日は覚えておいていただきたいのです。

しかしそんなイザヤに対して、神の驚くべきメッセージが 9 節以降で告げられたのです。民の心を頑なにするメッセージを語れと。イザヤは聞きます。「主よ、いつまででしょうか」。これは、「こんなわたしのような者が救われたのだ。それならば、あのユダ王国に居る私と同じ民が救われない筈が無い」という、イザヤの神の主権を信じる信仰だと私は思うのです。しかし神の言葉は厳しいものでした。11―13節にあるように、町々は崩れ去り、国は見捨て去られる。十分の一が残されるがやがてそれも焼き尽くされる。あまりにも酷い状況です。しかし、「それでも切り株は残る」、「その切り株とは聖なる種子である」。その希望が、信仰がイザヤにはありました。この後、イザヤは自分の息子に、「シェアル・ヤシュブ（それでも残り者は帰ってくる）」と名づけました。彼は信じたのです。聖なる種子を信じ、期待したのです。そして神の子としてこの地上に来られたイエス・キリストは、そのイザヤの祈りとイザヤの預言を余すことなく成就された神ご自身でありました。

私のようなものが救われたのだからこそ、神はあの人にも救いを与えて下さる。そんな信仰を、約束を、私達は神さまから今朝はつきりと受け取りたいと思います。そして、「ここに私がおります。私を遣わしてください」と静かに、主に応えていく者でありたいと願います。